

J.LEAGUE™ NEWS

©J.LEAGUE PHOTOS



コンサドーレ札幌

「ファミリーJoin! SAPPORO! サッカー教室
～ファミリーで聖地厚別のピッチを体験しよう!～」

©J.LEAGUE PHOTOS



愛媛FC

「愛媛FCが大好きだ! ファミリーフォトコンテスト!」

©J.LEAGUE PHOTOS



川崎フロンターレ

「イツァスモウワールド2012
～川崎唯一のスモウ部屋 春日山部屋力士がやってくる!」

©J.LEAGUE PHOTOS



大分トリニータ

「～家族手*Join～だるまさんがころんだ大会」



ファミリーJoinデイズ 開催

ゴールデンウィークを中心にJリーグの全40クラブがホームスタジアムで多彩なイベント

Jリーグと各Jクラブは4月28日から5月6日にかけてのゴールデンウィークの期間を中心に、J1・J2リーグ戦の会場となったスタジアムで恒例の「JリーグファミリーJoinデイズ」を開催した。昨年は東日本大震災の影響で中止となり、2年ぶりの実施。各クラブが趣向を凝らした家族で楽しめるイベントに加え、Jリーグが20周年を記念してコラボレートした劇場版「名探偵コナン」with J.LEAGUE「名探偵コナン11人目のストライカー」に関連した企画もあり、多くの家族連れ、友人同士のファン・サポーターでにぎわった。(2ページに関連記事)

J.LEAGUE™ TOP PARTNERS

Calbee

Canon

KONAMI

AIDEM

Coca-Cola



J.LEAGUE™ 100 YEAR
VISION PARTNER

朝日新聞

J.LEAGUE™ FAIRPLAY PARTNER

東京エレクトロン

LEAGUE CUP SPONSOR

ヤマザキナビスコ

SUPER CUP SPONSOR

FUJI XEROX

J.LEAGUE™ OFFICIAL
EQUIPMENT PARTNER

adidas

J.LEAGUE™
OFFICIAL SUPPLIER

Johnson & Johnson

J.LEAGUE™ OFFICIAL
BROADCASTING PARTNER

スカパー!

SPORTS PROMOTION
PARTNER



J.LEAGUE™ OFFICIAL
TICKETING PARTNER

ぴあ



ファミリーJoinデイズ

「JリーグファミリーJoinデイズ」では、Jリーグ特命PR部女子マネージャーの足立梨花さんや、Jリーグ百年構想メッセンジャーのMr. ピッチも各地のスタジアムを訪れ、ファン・サポーターと触れ合った。また、来場者には、Jリーグ20周年記念プロジェクト 劇場版「名探偵コナン」with J. LEAGUE「青山剛昌先生描き下ろし JリーグオリジナルA5クリアファイル」がプレゼントされた。当日はあいにくの雨に見舞われた会場があったものの、子どもたちをはじめとするイベント参加者の笑顔、真剣な表情が印象的で、スタジアムでの1日を満喫した様子うかがえた。

ベガルタ仙台

ユアテックスタジアム仙台では「ファミリーでむすび丸&伊達武将隊と遊ぼう!」が開催された(5月6日)。宮城県のマスコットであるむすび丸、仙台市の奥州・仙台おもてなし集団伊達武将隊が集合し、コンコースやエントランスでは写真撮影会やふれあいイベントを実施。子どもたちもよろいを着て記念撮影を行った。



5月6日 仙台 vs 清水

©J.LEAGUE PHOTOS

大宮アルディージャ

「ポニーに乗れる! NACK5スタジアム大宮 一日動物園」(4月28日)では、かわいいポニーに乗れるほか、ヤギやヒツジ、小さな子どもが触れ合えるウサギやひよこも登場。ヤギやヒツジに野菜を与えたり、小動物を抱っこできるとあって、子どもたちは大喜び。「ふわふわしてる!」「かわいい!」と歓声を上げていた。



4月28日 大宮 vs 札幌

横浜F・マリノス

日産スタジアムでは「トリコロールファミリーDay~ご家族揃ってトリコロールランドに集合!~」(5月6日)が行われ、同スタジアムのある新横浜公園内のしんよこフットボールパークでは母子のサッカー教室を実施。参加した小学2年の奥滝稜介くんは「お母さんと練習するのは、すごく楽しかった」と笑顔で話した。



5月6日 横浜FM vs 札幌

©J.LEAGUE PHOTOS



5月3日 清水 vs 鹿島

清水エスパルス

アウトソーシングスタジアム日本平で開催されたのは「S-FESTA in ファミリーJoinデイズ」(5月3日)。さまざまなイベントの中でも、子どもたちの人気を集めたのは思い切り体を動かせるプログラム。複数のボールを使ったドッジボールに参加した小学4年の河合賢人くんは「大勢でボールを何個も使ったところが楽しかった」と満足そうに話した。

セレッソ大阪

キンチョウスタジアムでは「子どもたちに夢を!『どきどきチャレンジ! セレッソ大阪お仕事体験!』」を開催。カメラマンやスタジアムDJ、グリーンキーパーやVIP受付など、子どもたちが活躍した。実際の仕事体験を通し、クラブをより好きになってもらうのが目的で、最初は緊張気味だった子どもたちも、最後はすっかり慣れた仕事ぶり。

©J.LEAGUE PHOTOS



5月6日 C大阪 vs 神戸

©J.LEAGUE PHOTOS



5月6日 松本 vs 湘南

松本平広域公園総合球技場に駆け付けたMr.ピッチと記念撮影

©J.LEAGUE PHOTOS



5月6日 岡山 vs 岐阜

岡山市のkankoスタジアムで行われたイベントに参加した足立梨花さん(右端)

©J.LEAGUE PHOTOS



4月28日 柏 vs 鳥栖

来場者には「名探偵コナン」の原作者である青山剛昌先生描き下ろしのクリアファイルがプレゼントされた

柏、F東京、名古屋がACLでラウンド16へ進出



AFCチャンピオンズリーグ2012(ACL)グループステージが5月16日に終了し、柏レイソル、FC東京、名古屋グランパスが、いずれもグループ2位でラウンド16へ進出した。日本勢で一番乗りを果たしたのはグループFのF東京で、同2日にブリスベン・ローア(オーストラリア)を4-2と破り、1試合を残して決定。グループGの名古屋、同Hの柏は、最終戦でそれぞれセントラルコースト・マリナーズ(オーストラリア)、全北現代モータース(韓国)に勝利して決めた。同Eのガンバ大阪は4位に終わり、5年連続の16強入りがならなかった。優勝クラブはアジアサッカー連盟(AFC)を代表してTOYOTA プレゼンツ FIFAクラブワールドカップ ジャパン 2012(12月6～16日)の出場権を獲得する。

理事退任・追加選任のお知らせ

Jリーグ理事だった風間八宏氏が同職を退任。また、理事として、大塚唯史(アビスパ福岡 代表取締役社長)、Jリーグの大河正明(管理統括本部長)、中西大介(競技・事業統括本部長)の3名が追加選任された。

理事退任	
役職	理事
氏名	風間 八宏(かざま やひろ)
年齢	50歳(1961年10月16日生)
退任理由	本人の都合により辞任の申し出があったため
理事在任期間	3年9カ月(2008年7月18日～12年4月20日)

理事・監事一覧			
理事・監事	氏名	年齢	所属
チェアマン	大東 和美(おおひがし かずみ)	63	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
専務理事	中野 幸夫(なかの ゆきお)	56	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
※理事	大河 正明(おおかわ まさあき)	53	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ 管理統括本部長
※理事	中西 大介(なかにし だいすけ)	46	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ 競技・事業統括本部長
理事	井畑 滋(いはた しげる)	60	株式会社 鹿島アントラーズ・エフ・シー 代表取締役社長
理事	上西 康文(うえにし やすふみ)	56	白百合女子大学 事務局長
※理事	大塚 唯史(おおつか ただし)	51	アビスパ福岡株式会社 代表取締役社長
理事	金森 喜久男(かなもり きくお)	63	株式会社 ガンバ大阪 代表取締役社長
理事	亀井 文雄(かめい ふみお)	58	株式会社 愛媛FC 代表取締役社長
理事	武田 信平(たけだ しんぺい)	62	株式会社 川崎フロンターレ 代表取締役社長
理事	田中 道博(たなか みちひろ)	54	公益社団法人 日本サッカー協会 常務理事兼事務局長
理事	橋本 光夫(はしもと みつお)	63	浦和レッドダイヤモンズ株式会社 代表取締役社長
理事	原 博実(はらひろみ)	53	公益社団法人 日本サッカー協会 理事・技術委員長(強化)
理事	福島 義広(ふくしま よしひろ)	61	株式会社 名古屋グランパスエイト 代表取締役副社長
理事	傍士 銃太(ほうじ せんた)	56	一般財団法人 日本経済研究所 専務理事
理事	松崎 康弘(まつざき やすひろ)	58	公益社団法人 日本サッカー協会 理事・審判委員長
理事	宮 裕(みや ゆたか)	57	有限責任 あずさ監査法人 パートナー・公認会計士
理事	村井 満(むらい みつる)	52	RGF Hong Kong Limited(リクルートアジア統括法人) 取締役社長
理事	ヨーコ ゼッターランド	43	有限会社 オフィスプロンズ 取締役社長
監事	味村 隆司(あじむら たかし)	53	株式会社 日本国際映画著作権協会 代表取締役
監事	吉田 修己(よしむら おさみ)	61	有限責任 監査法人トーマツ

太枠・※印=新任理事

敬称略 年齢は2012年5月24日時点

参与推薦の件

Jリーグは5月15日に開催した理事会で、2011年1月に清水エスパルスの実行委員退任後、同クラブの代表取締役会長に就任し、12年4月26日付で特別顧問となった早川巖氏および、12年2月にセレッソ大阪の実行委員退任後、同クラブの取締役役に就任し、4月20日付で退任した藤田信良氏の両氏を参与に選任した。

参与	
氏名	実行委員在任期間
早川 巖	2004年3月～11年1月(在任期間 6年10カ月)
藤田 信良	2008年2月～12年2月(在任期間 4年)

敬称略

シンポジウム「サッカースタジアムの時代」開催



講演を行う傍士理事

Jリーグは5月17日、津田ホール(東京都渋谷区)でシンポジウム「サッカースタジアムの時代」を開催した。日本国内でスタジアムの建設、設計などに携わる建設会社、設計会社、コンサルタント、ディベロッパー、施設関連メーカーや、自治体および関係団体、施設管理会社、Jクラブ、JFLクラブの関係者を対象に実施したもので、サッカースタジアムの理想像「スタジアムの未来」を参加者と共有し、サッカースタジアムを通じた新しいマーケットの創造について情報を展開することが目的。冒頭、Jリーグの大東和美チェアマンが「われわれの考えているスタジアムの理想形を伝えることで、未来への思いを共有したい」と開会のあいさつを行った。

その後、一般財団法人 日本経済研究所専務理事でJリーグ理事の傍士銃太氏が講演。国内外のスタジアムの現状に触れ、これからのスタジアムに求められる哲学や要件について解説した。続いて、公益財団法人 日本サッカー協会理事で同施設委員長の佐々木一樹氏、Jリーグ理事/管理統括本部長で同クラブライセンス・マネージャーの大河正明が、事前に受け付けた質問に答えた。

労使協議会 発足のお知らせ

公益財団法人 日本サッカー協会、公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)、および労働組合日本プロサッカー選手会は5月10日、労使協議会を発足することに合意した。労使協議会は、Jリーグに所属するプロサッカー選手の労働条件および待遇などの課題について、労使が対等な立場で円滑に協議し、情報・認識の共有化と相互理解を図り、日本サッカーの発展に貢献することを目的とする。

平成24年度「ダメ。ゼッタイ。」普及運動を後援、および「ダメ。ゼッタイ。」国連支援募金運動を協賛

Jリーグは5月15日に開催した理事会で、平成24年度「ダメ。ゼッタイ。」普及運動の後援について、また、同運動に併せて行われる「ダメ。ゼッタイ。」国連支援募金運動への協賛を昨年に引き続き実施することを決定した。

Jリーグ20周年応援企画「マイJクラブ プログラム」発表会

歴史的なJリーグの開幕戦が行われてから、ちょうど19年となる5月15日、JFAハウスでJリーグ20周年応援企画「マイJクラブ プログラム」発表会が開催された。Jリーグトップパートナーの日本マクドナルド株式会社と日本コカ・コーラ株式会社によるコラボレーションで、ウェブサイトを通じて応援するJクラブを登録し、チームがJリーグの試合で勝つと全国のマクドナルドの店舗で利用できるデジタルクーポンが発行される。発表会では、19年前の開幕戦に出場した北澤豪氏(元ヴェルディ川崎)、水沼貴史氏(元横浜マリノス)によるトークセッションも行われ、Jリーグ開幕当時から活躍する三浦知良選手(横浜FC)も登場した。



左から、水沼氏、日本マクドナルド株式会社の原田泳幸 代表取締役会長兼社長兼CEO、大東和美 Jリーグチェアマン、三浦選手、日本コカ・コーラ株式会社のダニエル・H・セイヤー代表取締役社長、北澤氏

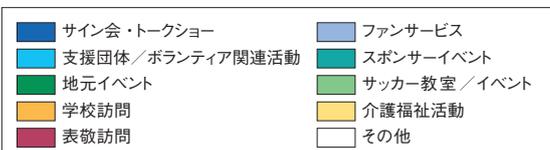
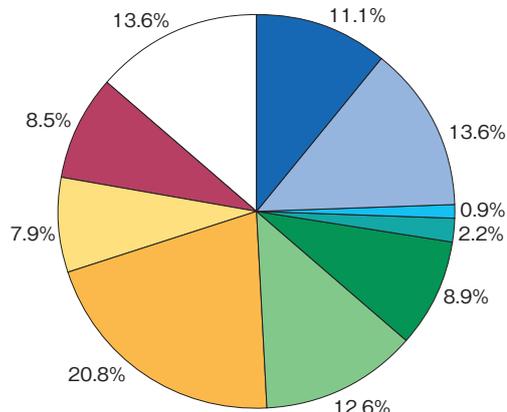
2011 Jリーグ選手等ホームタウン活動調査

Jリーグは、Jクラブに所属する選手、監督などが、2011年1～12月にホームタウン活動に参加した状況を発表した。この調査は、各クラブのホームタウン担当者が、アンケートに入力して提出する活動記録を集計したもので、ホームタウン活動への参加状況を時間・場所など詳細に把握した。クラブ間で情報を共有し、今後の活動に結び付けるなどの目的がある。Jリーグは今後も、このような集計を通して選手、監督・コーチ、クラブ関係者のホームタウン活動を推進していく。(ここに紹介するのは調査結果の一部)

活動ジャンル

◆2011年内訳

- ・最も多い活動は「学校訪問」で、全体の中の約2割を占める。
- ・以下、「ファンサービス」、「サッカー教室／イベント」、「サイン会・トークショー」、「地元イベント」と続く。
- ・「その他」の活動には、「集客活動」、「チャリティーイベント」、「スポーツ教室／イベント」、「環境活動」の他、「食育」や「必勝祈願」、「商店会／サポートショップあいつ回り」、「クラブへの応援品、義援金贈呈式」なども含まれる。



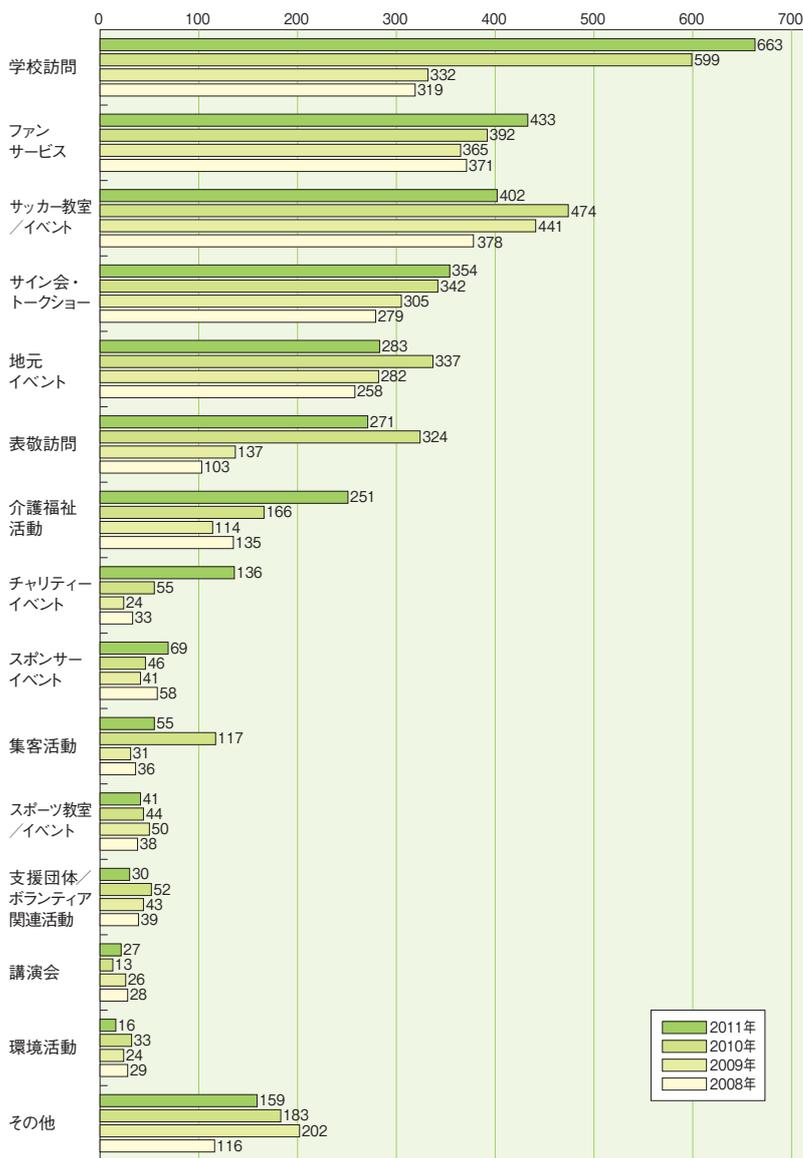
活動ジャンル別サマリー

- サイン会・トークショー (11.1%)**
 - ・2008年から増加傾向。4番目に多い活動。
 - ・約80%がファン・サポーターを対象にしている。
 - ・クラブの主催が大半だが、スポンサーの主催で行うものも約10%を占める。
 - ・スタジアムで開催するケースが70%程度、街頭／商業施設で行うケースが約20%。
 - ・シーズン中の5～11月はコンスタントに行われている。
- ファンサービス (13.6%)**
 - ・2009年から活動数は増加傾向。2番目に多い活動。
 - ・大半がファン・サポーターを対象とした活動。他の対象は小学生(のファン)や不特定(街頭でのイベント)など。
 - ・クラブの主催が大半を占めるが、スポンサー主催も約10%を占める。
 - ・スタジアムで開催されることが多く、約60%を占める。街頭／商業施設や、一般貸しスペース、クラブ施設のケースもある。
 - ・年間通して行っているが、11月の活動数が最も多く、次いで、7月、10月、12月。
- 支援団体／ボランティア関連活動 (0.9%)**
 - ・活動数は2010年から減少。
 - ・半数がクラブ主催、半数が後援会自ら主催している。
 - ・一般貸しスペースで行うケースが最も多い。
 - ・シーズン終了後の12月の活動数が最も多く、次いでシーズン前の2月が多い。
- スポンサーイベント (2.2%)**
 - ・活動数は2010年から増加。
 - ・クラブが主催となっているケース以外に、スポンサー自身が主催の場合が約20%ある。
 - ・主に一般貸しスペースを利用して開催しているが、企業やスタジアム、街頭／商業施設などでの開催もある。
 - ・Jリーグのシーズン前や終了後の2月、12月の活動数が多い。

- 地元イベント (8.9%)**
 - ・活動数は2010年から減少。
 - ・地域住民を対象にしたものが半数以上で、次に不特定の人を対象にしたイベントが続く。
 - ・行政主催のイベントが約3分の1を占め最も多く、この他に自治会／商店街やスポンサー、地域の実行委員会のものもある。
 - ・街頭／商業施設で全体の約半数が行われ、次いでスポーツ施設／公園で行われるケースも多い。
 - ・7月、8月の活動が多い。
- サッカー教室／イベント (12.6%)**
 - ・2010年から活動数は減少。3番目に多い活動で2009年(1位)、10年(2位)と活動数順位を下げている。
 - ・小学生以下の児童を対象にしたものが約70%を占め、その保護者や中学生以上を対象としたものもある。
 - ・約40%をクラブが主催しており、他にスポンサー、行政、地元サッカー協会も主催している。
 - ・スポーツ施設／公園で実施するものが最も多く、スタジアム、学校、クラブ施設と続く。
 - ・12月の活動数が最も多く、次いで11月、8月も多い。

◆2011年／2010年／2009年／2008年比較

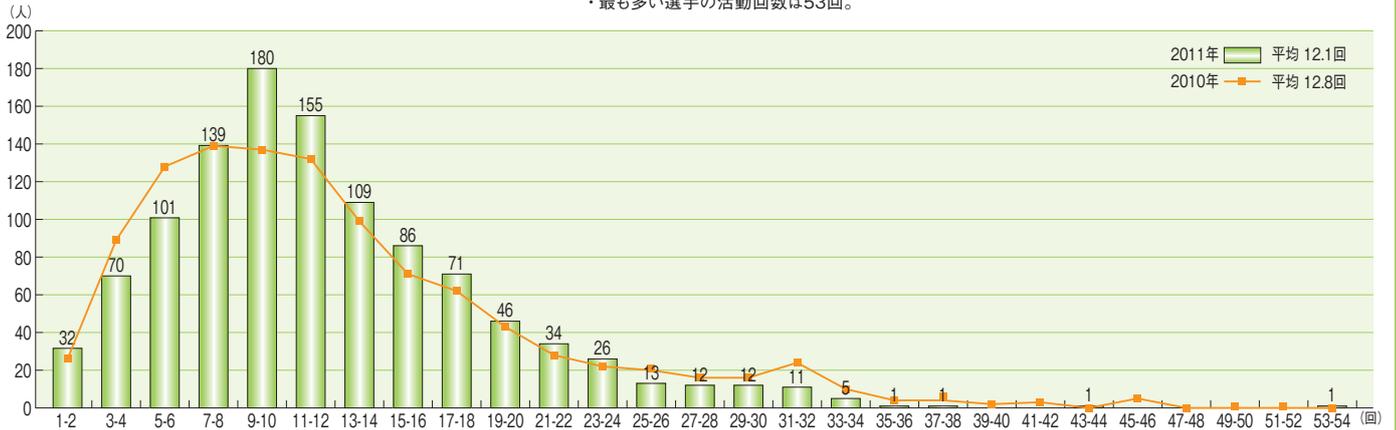
- ・「学校訪問」は2010年からさらに増加しており、引き続き最も多い活動となった。10年に2位の「サッカー教室／イベント」の活動数は減ったが、3位の「ファンサービス」は増えたため、順位が入れ替わった。
- ・活動の多い上位5ジャンルのラインアップは変わらない。
- ・10年比で大きく増加した活動は「介護福祉活動」、「チャリティーイベント」。



選手の活動

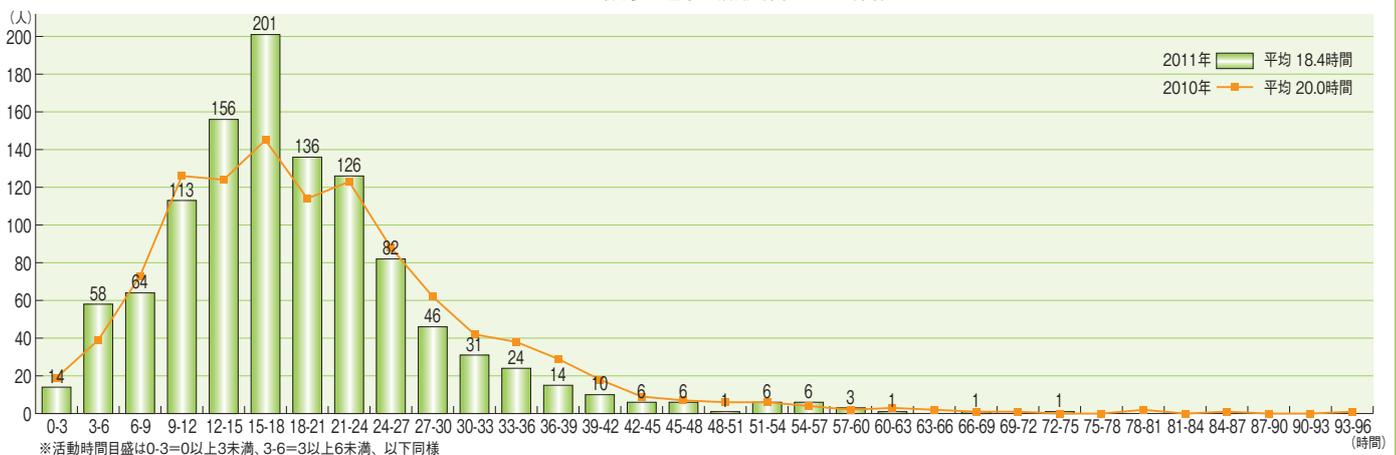
◆2011年活動回数分布(2010年比較)

- ・選手一人の活動回数は、9-10回を中心に7-12回がピークとなっている。中心は、2010年の7-8回から増加。
- ・10年と比較して、25回以上の活動をした選手数が減少しており、平均は0.7回減少となった。
- ・最も多い選手の活動回数は53回。



◆2011年活動時間分布(2010年比較)

- ・選手の活動時間のピークは2010年と同じく、15-18時間。
- ・10年と比べて、15-18時間に集中し、24時間以上活動した選手が減少。平均1.6時間減少となった。
- ・最も多い選手の活動時間は73.5時間。



監督・コーチ／社長の活動

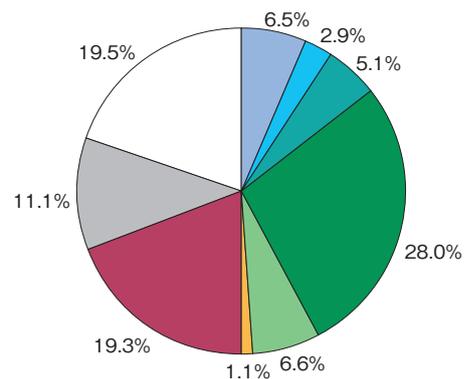
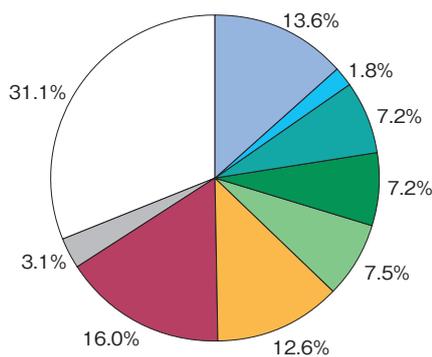
◆2011年 監督・コーチの活動

- ・監督・コーチの活動数は2010年と比べて減少。
- ・監督・コーチが単独で行動するケースは、全体の約20%。10年の約10%に比べ、増加している。
- ・活動ジャンルで最も多いのは「表敬訪問」、次いで「ファンサービス」、「学校訪問」の順になっている。
- ・「その他」には「介護福祉活動」、「チャリティーイベント」や、必勝祈願、クラブへの贈呈式などが含まれる。



◆2011年 社長の活動

- ・社長の活動数は2010年と比べて増加。
- ・社長単独での活動が全体の70%で、この比率は10年とほぼ同等。
- ・最も多い「地元イベント」には、地域の会議への出席の他、新年会や交歓会などへの参加も含まれる。「地元イベント」を主催する「行政」や「自治会・商店街」との連携強化活動が多いことが分かる。
- ・「その他」には、監督・コーチと同じく「介護福祉活動」、「チャリティーイベント」や、「集客活動」、クラブのための活動(「必勝祈願」、「クラブ激励イベント、盛り上げプロジェクト」、「商店街巡回営業活動」など)が含まれる。



Jクラブと歩む「地域」「ひと」

25

東京ヴェルディ

新しい戦士キャラクターがごみ減量に
一役。アイデアと熱い心で広がる輪

© J.LEAGUE PHOTOS

今シーズンの開幕戦で登場した「ごみゼロマンヴェルディ」。早速、子どもたちの人気を集めた

「ごみゼロマンヴェルディ」の完成

東京ヴェルディは従来から地域貢献活動に力を注いできたが、2010年に新体制になってからは、より「地域密着」の姿勢を強くしている。イベントへの選手やコーチの派遣、地域の商店街で開催される祭りへの積極的な参加、さらには環境活動も盛んに行っている。その数は年間250にも及ぶ。

そんな中で、東京ヴェルディとの協働をスタートさせたのが、クラブへ出資している自治体の一つ、日野市の環境共生部「ごみゼロ推進課」だった。廃品を再利用してつくったオリジナルキャラクターの「ごみゼロマンヴェルディ」がことし2月に完成。ヴェルディのクラブカラー、グリーンも鮮やかな戦士がここに誕生した。

ごみ減量運動を展開している同推進課では昨年、啓発戦士「ごみゼロマンレッド」というキャラクターをつくってイベントなどで活動するとともに、日野市内の幼稚園や保育園で子どもたちへの「出前授業」を始めた。その活動が好評だったことから、馬場弘融市長の「3体から5体ぐらいつくって戦隊にしては」との後押しもあって、昨年暮れに二つ目のキャラクター制作に取り掛かった。同推進課の小笠俊樹課長は「レッドの次は何にしようか考えた。なくしていかねばならないのは生ごみで、それを減らせばご



小笠俊樹氏

みは半分に減る。その戦士のイメージは『みどり』にしよう。じゃあ、ヴェルディに声を掛けよう。そうしたら、話に乗ってくれました」とその経緯を語る。小笠さんと東京ヴェルディとの直接の接点はなかったが、出資自治体でもある日野市とはスポーツ教室の開催などで深いつながりがあることから、とんとん拍子で話はまとまった。

東京ヴェルディの今シーズンの開幕戦、3月4日の味の素スタジアムでの松本山雅FC戦が、ごみゼロマンヴェルディのお披露目だった。クラブのツイッターで情報が流れたこともあって、上々のデビューとなった。「初めてなのに『ごみゼロマン!』と声を掛けられた。子どもたちと握手したり、写真を撮ったりと、予想を上回る反響でした」と小笠さん。試合後のスタジアム清掃活動にも一役買い、しっかりとごみ減量をアピールした。

扮するのは課の皆さん

ごみゼロマンヴェルディは早速、レッドと共に出前授業にも参加した。「ごみゼロマンヴェルディの方が喜ばれましたね。サッカーをやっている子も多いから」と言うのは、出前授業やイベントで司会進行役を務めている日野市「ごみゼロ推進課」の高見博治さん。実は、レッドとヴェルディを演じるのも同課職員の皆さん。小笠課長も戦士に扮



高見博治氏

して汗を流す。「こういうのは嫌いじゃないので」と笑う小笠さんに、「課長自らやってくれるので、ありがたいですね」と高見さん。休日を返上してのボランティア活動だが、「味の素スタジアムの次は、国立競技場のピッチにも立ちたい」とやる気満々だ。

このごみゼロマン戦士を車体に描いたラッピングカーがこのほど出来上がり、幼稚園や保育園を巡回することになった。日野市に加わったこの新しいご当地キャラは、「ECOプロジェクト」と銘打って多摩川やスタジアム周辺の清掃をはじめとする環境活動に地道に取り組んできた東京ヴェルディとホームタウンをつなぐ大切な存在になりつつある。今後は、同じく出資自治体である稲城市、多摩市、立川市と連携していくことも十分に考えられる。「これを機会にヴェルディをどんどん応援して、ごみ減量の啓発活動にもつなげたい」と、小笠課長は意気込みを語ってくれた。アイデアと熱い心が、その活動の輪を広げようとしている。

(共同通信社 北條 義幸)



ごみゼロマン戦士をあしらったラッピングカー。日野市の幼稚園や保育園を巡回する予定 ©日野市

「豊かで充実したスポーツ環境を実現し、地域に根差したスポーツクラブを中心に、日本にスポーツ文化を育む」ことを目指す「Jリーグ百年構想」のもと、Jクラブはそれぞれのホームタウンを中心に、さまざまな取り組みを行っている。そして、Jクラブの存在、活動は、地域とそこに暮らす人々に影響、刺激を与え、新たなムーブメントを生んでいる。Jクラブと手を携えながら、ともに歩む人々や、その活動を紹介するこのシリーズ。今号では東京ヴェルディ、大分トリニータと連携した地域の取り組みにスポットを当てた。



26

大分トリニータ



プロクラブの存在は県にとっての財産。 地域の盛り上げにチームの活躍を願う

交流給食への選手参加が定着

「いただきます!」

子どもたちの元気な声が教室に響く。机を向かい合わせて給食を楽しむ中に、青いユニフォームを着た大分トリニータの選手の姿があった。2007年5月に始まった大分市内の小学校での交流給食のひとつ。昨年度までに延べ44校(中学校2校含む)で実施している取り組みだが、もともとはクラブの活動として始まったわけではなかった。

きっかけは、トリニータのホームスタジアムに近い大分市立滝尾小学校が地産地消として考案した給食メニュー「トリニータ丼」。料理に使う県産の鶏肉とニラなどの生産者を招いた児童との交流を市の広報テレビ番組で取材することになった際、トリニータに名称使用などで問い合わせたことで、クラブが「せっかくなので選手も参加を」と学校を訪れることに。「まさにひょうたんから駒。まさか選手が来ることになるとは思わなかった」と、大分市教育委員会スポーツ・健康教育課保健給食係の内梨友子専門員は振り返る。

第1回の交流給食には当時、主将だった三木隆司(現・徳島ヴォルティス)が訪問。一緒に給食を楽しみ、数日後にはチームが全校児童を試合に招待した。「交流は1回だけと思っていた。ここまで続くとは考えもしなかった」(内梨専門員)という活動は年々盛んに。シーズン中、練習の合間を縫って選手が参加し、人気行事としてすっかり定着した。

交流は給食時間を一緒に過ごすだけでな



内梨友子氏

く、運動や質問コーナーも。内梨専門員は「スポーツにも親しみを持ってもらえるだけでなく、運動と栄養の関係を一緒に考えてもらえる機会」。給食が結んだ縁に、「大分銀行ドームも練習場も市内にあるので、訪れた選手を学校を挙げて応援に行くようになってほしいという思いもある。夢をもらった子どもたちが、選手に力を与えられれば」。

子どもたちにとって刺激、夢に

給食を通じた学校訪問だけでなく、県内全域をホームタウンとするトリニータは各地の学校への訪問活動、地域イベントへの参加も積極的に始めている。トリニータ以外にもバスケットボールのbjリーグやフットサルのフリーグ、バレーボールのプレミアリーグと、プロやトップリーグのチームが活躍する大分県。県が中心となって進めているのが、各チームの選手を県内の小学校に派遣する事業だ。

事業を担当する県文化・スポーツ振興課は「トリニータが1番人気」と明かす。山間部の児童数の少ない小学校にも出向き、スポーツで交流する。「スポーツの魅力を感じてもらうきっかけにもなる」と同課スポーツ振興班の飛弾芳一主幹。交流給食と同じように、訪問先の学校の子どもたちを試合に招待する。中学校やスポーツ少年団の練習に参加することも。最近は各地の祭りやイベントにも選手が足を運び、トークショーやゲームで交流することも多い。ジャンケン大会やリフティングの実演などで、イベントを盛り上



飛弾芳一氏

げる。昨年は県内全18市町村を訪れた。

トリニータが都市部だけでなく県内各地を訪れることは、地域の話づくりやイベントの集客にもつながっているという。飛弾主幹は「より地域に密着した活動が着実に増えている。プロクラブが身近に存在し、気軽に触れ合える機会が多いのは県にとって財産」と語る。

サッカー文化の定着も地域活動の一つ。選手名を冠した選手主催の低学年向けサッカー大会を開催したり、選手が県内各地に出向いてサッカー教室で指導することもしばしば。選手主催の大会は少年サッカーチームに限らず、県内各地の子どもが参加できるようにしている。

「プロ選手と触れ合えるのはもちろん、県内各地の人と交流できる。子どもたちにとって刺激にもなるし、夢を持つことができる」と話すのは、県の北端に位置する中津市のサッカークラブ「鶴居SSS」の安枝良二代表。チームは大会やイベントには必ずと言っていいほど足を運んでいる。「地方にプロサッカーチームがあって、すぐに会える環境は魅力ですね」。

02年に九州で唯一、FIFAワールドカップ開催地となった大分県で、トリニータがサッカー文化、スポーツ文化を盛り上げる上で一役を担っているのは間違いない。安枝代表が「トリニータを中心に大分が一つにまとまるのではないかと」話せば、飛弾主幹は「県民もトリニータに強くなってほしいと思っているはず。大分県を盛り上げるために、さらに活躍してほしい」と期待を込めた。

(大分合同新聞社 大塩 信)



安枝良二氏



大分市で活動が続く交流給食。大分の後藤優介選手と一緒に給食を楽しむ児童 ©大分トリニータ



昨年9月に大分市内で行われたイベントで、子どもたちと触れ合う森島康仁選手 ©大分トリニータ

信念を持って継続、進化を

東京スポーツ ◎ 三浦 憲太郎(みうら けんたろう)

PROFILE

1970年3月11日生まれ。埼玉県出身。日本大学第一高等学校-日本大学(法学部)。93年に東京スポーツ新聞社に入社し、サッカー担当。ヴェルディ川崎(現 東京ヴェルディ)や日本代表を担当し、FIFAワールドカップは98年のフランス大会から2006年のドイツ大会まで、ほとんどの日本代表の海外遠征をカバーした。



1993年、プロサッカーのJリーグが開幕。それと同時に記者はサッカー担当を拝命することになった。しかも担当チームは人気絶頂のヴェルディ川崎。キング・カズことFW三浦知良やMFラモス瑠偉、DF柱谷哲二、FW武田修宏、MF北澤豪ら、日本代表でも中心として活躍する大スター選手が集うタレント集団だった。

試合を行えば超満員御礼。クラブハウスには毎日メディア50人以上が集結し、サポーターも連日千人を超える。常に黄色い歓声が飛び交うなど、非常に華やかな雰囲気包まれていた。記者は右も左も分からない状況で取材に没頭する中「プロサッカーとは」を教えてくださいましたのはカズだった。15歳で単身ブラジルに渡り、18歳で名門サントスFCとプロ契約。その後、日本に逆輸入された。常にプロであることを意識しており、取材する記者もカズを通じ「プロの世界」を知った。

ある時、監督が「カズは少しけがをしているので、悪化させないためにも練習や紅白戦を回避させて、試合に備えてもらいたい」と発言。するとカズは指揮官の申し出を拒否し「自分が紅白戦に出ないで、代わりに出た選手が大活躍すれば自分の出番がなくなる。その後も試合にも出られなくなるかもしれない。そうなれば、日本代表にも選ばれなくなるんだ。少し痛いくらいでは休めない」と声高に訴えた。

そんなカズのストイックなまでの考え方は新鮮だった。さらに言葉だけでなく、実現するために何をするのか。全ての面でプロの姿勢を追求していた。例えば当時カズは試合前日に宿泊するホテルに入ると、まずカーテンから光がこぼれないように周囲をガムテープで止めることから始める。早朝にカーテンの隙間から光が差し込み、熟睡できなかったり、早く目が覚めることを嫌うための処置だ。

当時のカズは日本代表でも不動のエースストライカー。人気も実力も突出していた。

周囲の雰囲気もあって、華やかな部分ばかりにスポットライトが当たることが多かったが、サッカーへの取り組みはまさにプロフェッショナル。ピッチ外でもスーツ姿に高級外車でクラブハウスを訪れ、多くの視線を集めた。これも「いつも見られる立場にある。子どもたちの憧れでありたい」と話すなど、高い意識を見せていた。

そんなカズの姿勢に多くの選手が大きな刺激を受けた。90年代にV川崎がJリーグ連覇を含め全盛期を迎えたのもカズをはじめ、プロ経験のあるラモスなどの影響があったことは間違いないだろう。もちろんカズの取材を続けることで新米だった記者もプロの厳しい世界を思い知らされたし、トップアスリートの考えや哲学などを学ばせてもらった。

当時のカズの取り組みも現在では常識、当たり前のことなのかもしれない。ただV川崎だけではなく、鹿島アントラーズでは「サッカーの神様」と呼ばれたジーコがそうだったように、先人のプロ選手たちの言動がチーム内に浸透し、現在まで受け継がれていること

を否定する人は少ないだろう。チーム内に広まれば、リーグ全体にも波及する。こうした積み重ねが選手のレベルを上げ、チーム力をアップさせた。それがリーグ全体の活性化につながり、20年目を迎えるJリーグを支えてきたことは間違いない。

Jリーグは20年で国内屈指の人気競技となった。毎年少しずつ積み重ねることで、進化した。93年に10クラブだったJリーグは全国に広がり、現在は40クラブと確実に定着しつつある。かねてカズは「日本でサッカーが文化の一つになること。それが理想かな」と明かしていた。あいさつや日常会話でもサッカーの話題が普通に話されるようになること。国民がサッカーへの関心を高めることが、さらなる競技力の向上とリーグの発展につながる。

これまで積み重ねたものをしっかりと次世代に引き継ぎ、さらに新たな考えを積み増すこと。選手だけでなく、現場やクラブスタッフら、Jリーグに関わる全ての人々が信念を持って継続し、進化させていくことが求められるのではないかと。



© J.LEAGUE PHOTOS

20年で少しずつ積み重ねることによってJリーグは進化を遂げてきた(写真は1993年5月15日のJリーグ開幕戦、V川崎 vs 横浜M。中央の11番が三浦「カズ」)

